



## 美しい夜、残酷な朝 (スリーモンスター / THREE... EXTREMES)

2005(平成17)年6月21日鑑賞<ナビオ TOHO プレックス>

プロジェクトリーダー=ピーター・チャン ①香港篇『dumplings』監督=陳 果<sup>フルーフ・チン</sup> / 出演=楊千嬅<sup>ミリアム・ヨウ</sup> / 白靈<sup>バイリン</sup>  
 / 梁家輝 ②日本篇『box』監督=三池崇史 / 出演=長谷川京子 / 渡部篤郎 ③韓国篇『cut』監督=パク・チャヌク / 出演=イ・ビョンホン / カン・ヘジョン (角川映画配給 / 2004年香港、日本、韓国映画 / 124分)

……これはイ・ビョンホンと長谷川京子が共演する日韓合作のラブストーリー映画ではなく、アジアンホラーを共通テーマとし、香港・日本・韓国の3人のビッグネームが監督をつとめたオムニバス映画。しかしどうも宣伝が今ひとつ……？ 『dumplings』『box』『cut』という3つのタイトルがいかに意味シンな内容を含んでいるかは、映画を観てのお楽しみに……。かなりコワくなる映画だが、まさにそれがこの監督たちの狙い……。したがってそうなれば大成功なのだが……。

### これは一体何の映画？

この映画はタイトルを見ただけでは何の映画かさっぱりわからない。また新聞の宣伝を見ても、1番目を引きそうなイ・ビョンホンと長谷川京子の名前が目立つようにしているが、その見出しだけでは何の映画かわからない。

多分そういう宣伝上のマズさがあったのではないかと思うが、「ナビオ TOHO プレックス」では小さな劇場が割り当てられたうえ、私が行ったのが夜8時40分からのラスト上映ということもあり、観客は十数名のみで、当然のように男は私ただ1人。あとは多分イ・ビョンホンの名前で観に来ているのだらうと思われる数組の女連ればかり。これでは興行的には大失敗だらう……？

小説版(ノベライズ)『美しい夜、残酷な朝』(行川渉著・2005年・角川文庫)があるようだが、これだってそのタイトルだけでは一体何の物語なのかさっぱりわからず、

余計混乱させているのでは……？ それならば、端的にこの映画の本質どおり『アジアンホラー 3つの物語』とかにした方がわかりやすかったのでは……？

## 最近のオムニバス映画あれこれ

最近なぜかオムニバス映画が多いように思える。最近私が観たものだけでも次の3つがある。すなわち、

- ①『愛の神 エロス』（2月15日）（3話）
- ②『フィーメール』（4月6日）（5話）
- ③『もし、あなたなら～6つの視線』（5月3日）（6話）

②は日本、③は韓国の映画だが、①は中国、アメリカ、イタリアの3カ国の監督を集めたもの。そしてこの『美しい夜、残酷な朝』は、①と同じように香港、日本、韓国の監督を結集したもの。こういう数カ国の監督を結集して1本の映画をつくるのは結構面倒臭い作業が必要なはず。その最大のポイントは、それぞれに個性的（わがまま？）な監督の意向（趣味？）をうまく（機嫌よく？）まとめあげること……？ そのためには、全体の企画・プロデューサーの腕前がモノを言うはずだ。

## この映画の狙いとプロデューサーは？

この映画は、アジアンホラーの先駆けとなった『THREE／臨死』の第2弾として企画されたとのこと。しかし残念ながら私はこの第1弾を観ていないので、実はその狙いがよくわからなかった。このアジアンホラーをテーマとして、3つの物語からなるオムニバス映画を企画・プロデュースしたのは前作に続いてピーター・チャン。香港の映画監督であるピーター・チャンは、小林正樹監督の『怪談』（65年）に着想を得て、この映画を企画し、プロジェクトリーダーを務めたというわけだ。

## すごい監督を結集したのに……

3つの物語の監督はビッグネームばかり。香港の陳<sup>フルーツ・チャン</sup>果監督は『ドリアン・ドリアン』（00年）や『ハリウッド★ホンコン』（01年）（『シネマルーム5』286頁参照）で私の大好きな監督。日本の三池崇史監督はとにかく異色の監督で、今年の夏は『妖怪大戦争』が公開される。三池崇史監督の、この『box』は、これも超破天荒な映画『IZO』（04年）（『シネマルーム6』222頁参照）とともに2004年のベネチア国際映画

祭にダブル出品されたとのこと。

そして、韓国のパク・チャヌク監督は、『JSA』（00年）はもちろんだが、何といっても2004年のカンヌ国際映画祭でグランプリを獲得した『オールド・ボーイ』（03年）が衝撃的だった（『シネマルーム6』52頁参照）。こんなビッグネームの3人の監督が描くホラーはそれぞれに強烈で美しく、そして戦慄を覚えるもの……。そんな立派なおムニバス映画なのに、こんな少ない観客ではちょっともったいない……？

## 第1話 香港篇『dumplings』 不老長寿と永遠の美しさ……？

秦の始皇帝が不老長寿の薬を手に入れたいと本気で願ったこと、そしてそのために始皇帝は薬師の徐福をしてその薬を探し求めるために、「東の国」への旅を命じたことは有名な話。しかし何とこの徐福は中国に戻らず、日本に長くとどまったことは、和歌山県新宮市に徐福のお墓があることから明らかだという「徐福伝説」は果たしてホント……？ 女性は永遠の美しさを求めるもの。寿命が短かった昔はいざ知らず、豊かになった先進諸国においては、そのためのダイエットや美容術は格段の進歩を遂げている。しかしそのアプローチの仕方はさまざまで、韓国では端的に整形に走り（？）、アメリカや日本では金にまかせたダイエットや美容術が中心……。しかし医食同源の国である中国や香港では、それらの美容術とともに食事（食生活）による若返り術が大きなポイント。この『dumplings』はそれがテーマだが……？

## ちょっとコワイ特製餃子の中身は……？

タイトルの『dumplings』とは餃子のこと。しかし、餃子がいくら「健康食」だといっても、女性が若返り、その美しさを保つことができる特製餃子の中身って、一体ナニ……？ 「東洋医学では古くから医薬に人間の胎盤が使われてきた。もし、人間の胎盤に医薬的効果だけでなく、永遠の美をもたらす力があつたとしたら……？」  
フルーツ・チェン  
陳果監督はこう語っている。すると、この特製餃子の中身はひょっとして……？

## 私つくる人！ あなた食べる人！

この餃子を「つくる人」は、ナゾの女メイ（バイ・リン白霊）。秘密のルートをもった特別の客だけが訪れるメイのアパートは、その半分が厨房となっており、そこで特製餃子が……。このメイ自身が、年寄り（？）のクセに（ちなみにメイは、自分がメイ婆と呼

ばれていると自己紹介……) なぜか肌がツヤツヤして、若く美しいから、その巧みな話術もあって、客は美しさのためなら餃子の値段が高くとも、と思うのは当然……。

他方、特製餃子を「食べる人」としてメイのアパートを訪れたのは、成功した事業家(梁<sup>レオン・カーフアイ</sup>家輝)を夫にもつ、リー夫人(楊<sup>ミリアム・ヨン</sup>千嬅)。夫が若い愛人の所に入りびたっているのは、自分の容貌が衰えたせいだと考えたリー夫人は、意を決してこのアパートを訪れ、少しコリコリと音のする特製餃子を食べたが……？

## ロングバージョンもあり

この『dumplings』は約40分の短編だから、象徴的なシーンが随所に散りばめられ、余韻を残したつくり方になっているが、香港では90分のロングバージョンも公開されているらしい。パンフレットによると、この90分バージョンは、同じく特製餃子をテーマとしながらもかなり激しい人間ドラマが展開され、エンディングも違うとのこと。ちょっと恐いけど、是非それも観てみたいものだ……。

## 第2話 日本篇『box』 三池流の静けさと美しさが不気味

この『box』はセリフがきわめて少なく、ホントに静かな映画。そして美しい雪のシーンがふんだんに。しかし逆に、美しい景色の中で静かに進んでいく物語はすごくコワイもの……。主人公の鏡子(長谷川京子)は女流作家で、吉井(渡部篤郎)はその担当の編集者。原稿を取りにくる吉井の鏡子を見る目はどことなく異様。そして、それに輪をかけたように鏡子も不思議な行動を……？

## ホントの主人公は幼い2人の姉妹……？

鏡子がいつも見る夢は、自分が箱の中に閉じ込められるものだが、その夢はいつも途中で終わってしまう。そこでさて、この映画のタイトルとされている『box』とは……？ 芝居小屋や手品でよく見る芸に、「box」の中に入ったはずの子供が、魔法をかけるといつの間にかその「box」から消えてしまう、というものがある。鏡子は小さい頃、姉と2人でいつもそんな芸をやっていた……。そんな2人の姉妹を指導していたのは、父親代わりの曳田(渡部篤郎の2役)だったが、ある日そこで大惨事が……？ 鏡子は美しく成長したものの、当然こんな幼い時の記憶を引きずって生きていた。だから、鏡子が今も毎日見る中途半端な夢は……？

## 長谷川京子に期待！

『キネマ旬報』の冒頭に「Face05」というページがある。これはその時期に最も旬な男優、女優が登場するもの。その5月下旬号のページに登場したのがこの長谷川京子。映画初出演は前述の『フィーメール』（05年）だから、まだ新米女優のはずだが、その姿は実に魅力的！ 三池監督に見いだされた「新進女優」長谷川京子の今後の活躍に期待したい。

## 第3話 韓国篇『cut』 イ・ビョンホンとイム・ウォニ、どちらが主役？

この映画の主役は、誰もがうらやむような地位と名声そしてお金を手に入れ、美しい妻ミラン（カン・ヘジョン）とともに豪華な邸宅に住んでいる若手映画監督のリュ・ジホ（イ・ビョンホン）。韓国四天王の1人であるイ・ビョンホンをトップに押し立てて、この映画を宣伝するのは当然のこと。しかしこの短編でのイ・ビョンホンは、そのほとんどが手を縛られ身体の自由がきかなくなった状態での演技で、あまり魅力的な姿ではない。むしろ、リュの家に侵入した賊を演じるイム・ウォニの演技の方が目立ち、どちらが主役かわからないほど……。イム・ウォニは『SILMIDO（シルミド）』（03年）に684部隊の兵士の1人として登場した俳優だが、この短編では、何も失うもののないヤケツパチな底辺の男の姿を實に見事に演じている。そして彼が、拘束されたリュとその妻の前で踊るダンスの切れ味も抜群……。

## 賊は何者……？

自宅に忍び込んだ賊が要求するものはナニ……？ 普通それはお金のはずだから、リュは自分が下手に出れば解決可能と考えていたが、実はそうではなかった……。賊はリュが監督した作品のすべてに出演していたという元エキストラ。そんな人間を監督がいちいち覚えているはずはないから、いくら自分の存在を思い出させようとして、賊がリュの目の前で、あの映画の、あのシーンを演じてみせても、リュは思い出せない。しかし、ある極限状態に至るとやっと……。こんな賊の目的はお金ではなかった。その目的はリュを破滅させること。そしてその動機は嫉妬心……。何も失うものを持たない賊がそんな動機・目的で忍び込み、リュも妻も完全に自由を奪われているのだから、こりゃどうしようもなく最悪の状態……。

## 妻の状態は？

リュの妻はピアニストだが、意識を取り戻したリュの目の前には、さるぐつわをかまされてピアノの前に座らされた妻が、その身体や腕、指を無数のピアノ線によって縛られた無残な姿が……。パク・チャヌク監督のやることは何ゴトも徹底していてコワイ……。パンフレットによれば、カン・ヘジョンはこんな状態での撮影が最長9時間も続いたとのこと。女優業もこんな役柄が回ってくると、とてつもなく大変……。

## 激突！ 2つの人生論

社会的には圧倒的に上位、下位の両極端にあるリュと賊だが、この密室の中ではその立場は完全に逆転！ そんな中、ピアニストである妻の指を人質(?)として展開される2人の男の人生論の激突は面白く、見ごたえ十分。こういうホラー映画(?)の中でも、真面目に人生論を語らせるパク・チャヌク監督だから、私は大好き……。

## 犯人が突きつけた究極の選択とは……？

リュは両手を縛られたうえ、腰のベルトによって一定範囲以上は歩けないようにされているものの、口を利くのは自由だから、肉体的苦痛はたいしたことなし……。そんなリュに対して賊が突きつけた究極の選択は、自分が連れてきている見ず知らずの小さな子供の首を絞めて殺せ、ということ。これを殺したら妻を解放してやるというわけだ。しかし、心やさしい(?)リュにそんなことはとてもできない……。すると賊は、5分経つごとにピアノ線で妻の指を1本ずつ切っていくと宣言し、無惨にもこれを実行。1本、2本、3本、さて……？

## パク・チャヌク監督は血が大好き……？

パンフレットには平素パク・チャヌク監督はバンパイア映画に挑戦したがっていたと書かれていたが、この短編の最初は、血を吸って生きている女のシーンから。このシーンを撮っているのがリュ監督なのだが、実はパク・チャヌク監督がそんな映画を撮りたいのかも……。その証拠に、この短編の結末は実にゾッとするようなバンパイア映画(?)になるから、それを十分お楽しみに……？

2005(平成17)年6月22日記